木の目草の芽

2014年10月22日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円
申込：047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便振替00180-4-710688
加入者名：川口章子

第１１２号
全国集会レジュメ号

〈目　次〉

P.1　自然保護全国集会を開催　近藤 雅幸
P.2　全国集会プログラム
P.3　基調講演
P.4　支部報告
P.21「写真が語る山の自然」　下野 綾子
P.22　活動記録

２０１４年度 自然保護全国集会を広島で開催します

自然保護委員長　近藤 雅幸

恒例の自然保護全国集会。今年は例年とは趣向が変わり、広島で行われる山岳平和祭に合わせて、その前日に行うことになりました。今回は日山協など他団体との調整もあり企画段階で内容がなかなか決まらないなど、皆さんにご迷惑をおかけしましたが、1か月前になってようやく内容が決まりました。

今回の基調講演はＮＨＫの井上恭介氏による「里山資本主義」。マネー経済への一つのアンチテーゼになる草の根の経済活動の報告です。日本の地域が本来持っている知恵を生かしたお金やエネルギーのかからないアイデアの数々は、今の世の中のありようを考え直すためのヒントになるかもしれません。山の自然環境保護とのつながりでは「里山資本主義」における森林資源の利用は鹿問題などのひとつの解決方法になりそうな可能性を感じさせます。

さらに宮城支部・福島支部による「山岳地における放射能汚染の実態」と静岡支部から「南アルプスの自然環境におけるリニア新幹線の影響」についての報告も予定されています。報告のあとはそれぞれのテーマについて参加者全員で討議を行うことを考えていますが、それを通じて山岳自然環境に大きなストレスを及ぼしていることれらの問題に対して理解と関心を深めてもらえればこの企画も意味あるものになるでしょう。

今回はフィールドスタディーもグループ討議もなく、いつもの自然保護全国集会とは違うプログラムになりました。いろいろ不都合もあるかもしれませんが、逆にこれまでにはなかった新しいものを持ち帰っていただけるかもしれません。

２０１４年度
公益社団法人日本山岳会
自然保護全国集会プログラム

■2014 年 11 月 22 日（土）
＜会　場＞<u>広島工業大学（鶴学園）広島校舎</u>　２階２０１号室
〒730-0811　広島市中区中島町 5-7　　Tel 082-249-1251

＜プログラム＞
11 月２２日(土)
10:00～　受　付
11:00～12:30　支部報告
13:30～　日本山岳会　森武昭会長挨拶
13:50～　基調講演「里山資本主義　里山が宝の山に変わる瞬間」
講師 NHK 大阪チーフプロデューサー　井上恭介氏
15:40～17:00　討論会　・山岳地における放射能汚染
・自然環境におけるリニア新幹線の影響
18:00～　懇親夕食会　（広島市文化交流会館）

＜宿　泊＞広島県スポーツ会館（観音青少年会館）
〒733-0036 広島市西区観音新町 2-11-124　TEL（082）292-1681

日本山岳会後援行事

■11 月 23 日（日）
『広島山岳平和祭・UAAA（アジア山岳連盟）創立２０周年記念行事』
10:00～11：00　平和・安全・安心・祈願「山岳平和祭」**<u>会場：平和記念公園</u>**
13:30～　国際シンポジューム「登山と自然保護」
<u>会場：アステールプラザ２階　中ホール</u>
※16:30 発表予定・・・日本山岳会 **下野綾子**　「写真が語る山の自然今昔」
（発表要旨は２１ページをご覧ください）
18:30～21:00　ＵＡＡＡ創立 20 周年記念祝賀晩餐会
<u>会場：リーガルロイヤルホテル広島</u>

■11 月 24 日（月）
『UAAA・UIAA　弥山（５３５ｍ）ハイク』
7:00　広島県スポーツ会館ロビー集合
8:30～15:00　**弥山ハイキング（宮島、厳島神社参拝）**

■■■■■■■■■■　基調講演　■■■■■■■■■■

『里山資本主義　里山が宝の山に変わる瞬間』

ＮＨＫ大阪チーフプロデューサー**井上恭介氏**

11 月 22 日（土）広島工業大学（鶴学園）広島校舎 201 号室

＜講師プロフィール＞

1964 年生まれ。

1987 年東京大学法学部卒業。同年、ＮＨＫに入局し、報道局、大型企業企画開発センター、広島局などでＮＨＫスペシャルなどの報道番組を制作。「マネー資本主義」の限界を見切った直後、東日本大震災に遭遇。その番組を制作する最中、転勤で広島へ。里山資本主義に出会う。

著書は『ヒロシマ壁に残された伝言』

『自動車革命』『マネー資本主義』

＜レジュメ＞

「里山資本主義」とは（20 世紀の常識から 21 世紀へ　転換のキーワード）

○「エコストーブ」に見る、里山資本主義の思想と理想

・活かされない身近な資源「山の木」を活用…**市場で売らなければ→ただで自分で使う**

・廃品である「ペール缶」を手作業で改造・製作…**誰かが完成したシステム→遊び・楽しみ**

・拾ってくる雑木で、エネルギー消費節約…**大きく・正式な「経済」→小さく・私的な「身の丈」**

・最先端炊飯ジャーよりおいしいご飯…**進歩と発展の時代→完成したあとの温故知新**

○「ペレット」が問い直す、私たちの固定観念

・製材所の「産業廃棄物」がエネルギーに…**「売り上げ」アップ→「支出」を見直す**

・石油のように市場価格の乱高下がない…**「グローバル」に隷属→自立した「地方」**

・ストーブの火を見ながら、ウイスキーが飲める…**「機能」だけ→楽しさ・豊かさも**

・石油のように供給・宅配するオーストラリアの「ペレットタンクローリー」…**技術革新！**

※20 世紀的「価値観」、「思い込み」、「あきらめ」からの脱却

※21 世紀的「本当の豊かさ」、「誇らしい暮らし」、の獲得

□□□□□〈支部報告〉□□□□□

各支部より、これまでにいただいた支部活動の報告要旨です。（全国集会欠席予定の支部からの活動報告も含みます）今号への掲載が間に合わなかった支部及び当日飛び込み・追加分の支部報告につきましては、次号（報告号）で紹介させていただきます。

■青森支部　　清野　宏

青森支部では、自然保護活動の一環としてブナ林再生事業を実施しています。

この事業は、白神山地世界遺産に隣接している杉の造林地を、本来あったブナを主体とする混交林に戻すために行っているものです。このブナ林再生事業を通して、自然愛護・環境保全の思想の普及、啓蒙を図り、自然の恵みや大切さを、躰でわかる青少年を育成することを目的に、１９９９年から始めたものです。

２００１年の第４回目からは、近隣の中学・高校生も参加するようになりました。又、２００１年には緑と水の森林助成事業になっております。

このブナ林再生事業は、２００５年には日本山岳会創立１００周年記念事業として、青森支部主催で行い、全国から会員７５名が参加して実施されました。

15年間の事業の回数は27回を数え、参加人員は８９０名に達しています。

今後もこの活動は継続して実施したいと思っていますが、この事業での植樹・育樹には長い年月を要するので、全国から会員の参加・協力を望んでおります。

■宮城支部　　柴崎　徹

２０１１年の「３・11東日本大震災」は、宮城県の自然や山々に、いまも二つの側面から大きな影響を与えている。ひとつは、沿岸防潮堤の再構築や地盤沈下にともなう埋立てに必要な土石の採取、安全地帯への集団移転などによる丘陵地の夥しい改変である。丘陵上のたくさんの山々が本来の姿を失っていくのは悔やまれることである。復興の名のもとに不適切な破壊や改変がなされないように注視していきたいと思っている。

もうひとつは、大震災直後に起こった東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染の問題である。私たちの宮城の自然や山岳が、この事故によってどの程度の被曝を受けたかは、支部の重大な関心事であったが、それを示すような測定データが皆無に等しいのが現状であった。

そこで、宮城支部は昨年６月、自然保護委員会を中核とした「山岳放射線量調査特別委員会」を設け、宮城県の主要山岳、山地、丘陵地などの山々を対象として、Ⅰ～Ⅲ期に分けて放射能汚染の実態を調査してきた。

Ⅰ期　奥羽山脈の主要山岳
Ⅱ期　山地及び丘陵地の山岳（特に阿武隈丘陵など）
Ⅲ期　北上山地及び築館・磐井丘陵の山岳

この調査によって

1．宮城県のほぼ全域にわたって事故による放射能の影響が認められること

2．奥羽山脈には、西側（山形県）への放射能汚染の拡散を抑制する役割効果があったこと

3．原発事故にともなう北西方向への強い帯状の放射能汚染は、確実に宮城県南部に到達していること、その距離は、いわゆる「30㎞」を遥かに越していること

4．これとは別に、宮城県北部から岩手県南部の北上山地、築館丘陵、磐井丘陵一帯にも高い地域が広く認められること（この地域については現在詳細調査を実施中）

などが明らかになっている。

Ⅰ・Ⅱ期分は、この6月「宮城県の山地及び丘陵における放射線測定結果報告書」にまとめ、県内外の山岳団体、山岳関係者、県及び各市町村、大学などの研究機関、放射線及び環境関係者に配布した。これまで調査対象として挙げた山岳は１８０山、調査地点数は４００地点である。

宮城支部の限られた調査メンバーだけでは覚つかないが、自然保護の一環として、私たちにできる調査を今後も進めて行きたいと思っている。

■秋田支部　　佐々木 長秀

今年の秋田支部自然保護委員会の活動は、堀井弘委員の活動を中心にしたものでした。その活動を次に紹介します。

・仁別森林博物館（森林管理局管理）
来館者に、自然散策・育樹作業・クラフト制作などの指導。（5／27～10／4までの13回担当）

・仁別植物園（秋田市管理）
ボランテア活動の自然観察員として、来園者に植物や樹木の説明。（4月～10月までの毎月、7回担当）

・自然学習センター・まんたらめ（秋田市管理）
派遣指導員として活動（植物観察会…小学生95名、太平山前岳登山…初心者の高校生20名、前岳登山…小学生38名）

・愛鳥週間行事（主催・秋田県自然保護課）
会場：秋田自然ふれあいセンター…小学生１４５名

・自然観察会（自然保護協会秋田支部）
「高岳山早春の花々」・「岨谷峡初夏の花々」・「八幡平黒谷地湿原」・「鳥海山麓滝巡り」

また、秋田支部の公益的事業の一つとして、秋田太平山の、ベンチや案内板の設置、登山道の草刈などの整備を行っています。

今後の課題は次の三点です。

①支部自然保護委員会を、より組織的なものにして行くこと。

②堀井委員の活動に学び、秋田支部全体のものにすること。

③行政や自然保護団体と情報交換し合い、県内の自然保護の課題について学習すること。などが考えられます。

■山形支部　　志田 郁夫

山形県は現在、県民一人当たり一千円を「みどり環境税」として（納税者対象）単年度約８億４千万円を徴収し、県内の荒廃した「里山」の整備や復元に税金を投入して取組み、既に6年が経過しています。その活動の中に、「やまがた絆の森づくり」が展開され広く、多くの団体や関係組織が参加して、森づくりや山岳環境保全に携わ

り普及啓発を行っておりその効果が、作業の実績として、又、県民の意思（意識）の中に効果が現れてきている。

以前、山形支部として報告しましたが、複数の会員が自ら「ヘクタール」単位で山林、原野を所有しており、これらの整備活動のなかで日頃頑張っており、支部としては会員の高齢化も含めて労働作業の伴う「自然保護」は取り組みにくいのが現状です。

現在行っている自然保護に関する活動は、日本山岳会自然保護委員会が１９９０年、静岡県で採択した鳥海山スキー場開発問題の取組みで「鳥海山生息イヌワシ調査班」を結成されましたが、１９９７年まで続いたその調査活動実績やデーターを「鳥海山ワシタカ研究会」として新しく組織して支部会員が継承しております。以来、20年も続く活動を山形支部事業の一端として今後「協力・応援」をすることになりました。

内容は、通年にわたる鳥海山南麓生息イヌワシのモニタリング調査。これは1か月間のうち出来るだけ連続４日間調査を原則として、年間をとおして厳しい厳冬期でも行われております。

山岳環境保全関係では、イヌワシの生息環境整備として、生息域の杉植林の列状間伐により生物多様性をうながし、猛禽類の餌場としての開放と周辺の野生生物の動態を調査し、食物連鎖の頂点に立つイヌワシの生息環境を整える作業です。また、本年度からは新たに鳥海国定公園内標高５００ｍ～６００ｍのススキ原野を「行政財産目的外使用許可」「減免措置許可」名目で行政から認可いただき、広大なススキ原野の列状的刈払いを会員が実施、無人自動カメラ等も設置し、生物多様性保全のさきがけとして、調査が始まりました。又、調査は鳥海国定公園にとどまらず、周辺朝日連峰まで及び、林野庁（森林管理署）より通年での「国有林野入林許可」を得て調査。調査中確認した災害崩壊現場などもリアルタイムで報告しています。

ほかに会員は、管内の地元小・中学校が課外授業として取り組んでいる「イヌワシを含めた猛禽類の生態・観察会」が6年前から続いて実施され、専属的に講師を務めて活動しています。述べたように、会員の高齢化による「山岳自然保護活動」は調査・啓蒙活動の方向に転換、山形県内これだけの山岳地を含め70パーセントの「山」が占める中で、県民に理解を得る為には一方では環境保全の普及啓蒙活動、一方では税金を投入した大掛かりな里山整備構想を出さない限り解決にはならないと考えます。

■福島支部　　高田　雅雄

～スキー場の閉鎖後について～

スキー人口の減少により経営が悪化し閉鎖されたスキー場やリフトの休止、使用ゲレンデの縮少、この様に放置スキー場が多くみられる様になってきました。

稼働しているスキー場では冬の雪以外に、ゲレンデの緑化が図られて花木を植えて観光地集客を図っているところもあります。私の居るところでも管理が放棄され、スキーセンターの建物は荒れ放題、リフトは放置、ゲレンデは表土の剥離や大きな石がゴロゴロしている箇所も見られます。標高も１１００ｍから最上部は１５００ｍスキー場、この荒れたゲレンデに緑を取り戻そうと、県や森林管理署そして私達森づ

くりボランテア団体が連携して植生の復元を進めようとスキー場跡地の植生回復について研修会が開かれました。

初めに講師の先生からゲレンデの土壌について、周辺の植生について調査しどのような復元が望ましいか検討することにした。スキー場のゲレンデは雪解け水や，雨水により表層部の剥離や洗窟箇所が広がりそれがガレ場を露出させている。これに対して表土の流出防止は基盤の整備（土壌の安定化）土留めが必要であり、又水の処理これは水路の分散、筋や階段、排水路を作り周辺の樹木、ミズナラ、ブナ林、カラマツの人工林があるので、種子の散布により発芽や生育が促進、種子の流失、土砂埋設による幼苗の枯死が防げる。

現状でも周囲を見れば森林からの種子散布により特にミズナラ、ブナの落葉層堆積に幼木が育ち植生回復の兆しが見られます。人工苗については外部からの移植でなくその地域で取れた苗を植栽することが望ましいとのアドバイスもありゲレンデ周辺の残存植生により、緑化復元を目指す指針が示された。

今後は各ボランテア団体と協力し表土の流失防止をして植栽を進めていくことが復元の始まりでしょう。またこのような事は私達が行っている登山道の慌廃部の復元にも共通するものもあるのではないでしょうか。

■茨城支部　　堀内　孝雄

茨城県の山地は県土の１／３を占め北から南へ太平洋側に阿武隈山地、県北部の中ほどに有名な袋田の滝のある久慈山地、福島、栃木、茨城の３県境界に位置する八溝山（県内最高峰１０２２ｍ）から南へ筑波山へと続く八溝山地があります。県中央部から南部は広い平地で関東平野になっています。福島県境から南の太平洋側は１８３Ｋｍに及ぶ長い海岸線です。

茨城県は暖温帯の常緑広葉樹林域から冷温帯落葉広葉樹林域への移行帯にあたるので、ハマナスのような茨城県を南限とする植物や北限とする植物など多の貴重な生物種が見られるほか山地には筑波山や袋田の滝など多くの貴重なジオパークに指定されている山地があります。

こうした自然的背景をもつ私たちの茨城支部の最近の自然保護活動として次の３つの点があげられます。

まず、第１に支部で「茨城の山辞典」を出版したことです。

よく茨城県内には山はいくつあるのか疑問視されます。茨城支部で議論された結果、県内には３００座以上もの多くの山があることになりました。茨城支部ではこれらの山への登山コース、登山案内、山の植物自然の特徴、周辺の産業、観光等を記した『茨城の山事典』（第１版）を平成25年1月25日に出版しました。

茨城支部は平成19年（２００７年）６月に創立されたので茨城支部創立５周年記念としてつくられたもので自負することのできる自然保護活動といえると思います。編著者の酒井国光氏と画期的な事典の出版に協力された支部会員の皆さんに敬意を表します。

支部の自然保護活動その２は支部の講演会の開催です。支部創立以来隔月に開催される支部の例会にあわせて毎回「講演会」が開催されて来たことです。講演会には支部長はじめ会員が講師となり一般公開を原則として、県内外、国内外の山への登山、

遠征報告、調査報告、山の自然などの科学的な調査や報告等が行われ、科学的にも学術的にも高度な講演会となっています。そのたびに私は、多くの人たちに聴講していただきたいと思いました。私は、まさに有意義な自然保護講座だと思っております。

３つ目に私も担当している支部の野外研修会「自然観察会」をあげてみます。毎年２～３回、県内の山や注目すべき森林などの案内をして一般の人を含めた森林植物観察会、山歩き、森歩きを楽しんでおります。私は平成３年に誕生した森林インストラクター制度の第一期生です。全国森林インストラクター会初代会長、茨城県植物園緑のインタープリター、おもしろ理科先生（茨城県教育委員会登録）、子ども樹木博士認定活動推進協議会幹事などとして、小中学校や各地の公民館等から自然観察会の講師を依頼され年に30～40回ほど活動してきました。

多くの人たちに、自然の美しさや楽しさ、自然や森林の大切さを理解していただきたいと思っています。

■栃木支部

石澤　好文

本支部の自然保護委員会の活動として、栃木県山岳連盟との共催事業である『日光清掃登山』及び栃木県山岳連盟、栃木県勤労者山岳連盟との共催事業である『那須クリーンキャンペーン＆清掃登山』を実施しています。この事業は、山の日制定プロジェクトとして取り組んできましたが、本年山の日の制定が決定され、その制定の意義を広く周知することを目的として実施されました。この二つの事業について報告します。

1．日光清掃登山

7月5日（土）午後5時より清掃登山に先立ち、支部会員2名、岳連等参加者約20名が参加し「日光の自然を考える集い」と題して、湯の湖荘のご主人で地元奥日光の自然保護活動に尽力されている伊藤誠氏の講演会が行われた。その後、栃木県山岳連盟自然保護委員会主催の前夜祭が行われ親睦を深めた。

翌7月6日（日）は、雨の合間の晴天に恵まれ、湯元ビジターセンター前広場の開会行事の後、各会に分かれて清掃登山を行った。本支部では、前白根山・五色山コース（会員3名、一般4名）と女峰山コース（会員1名）に分かれて清掃登山を行った。午後2時に湯元に戻り、回収したゴミを分別し湯の湖レストハウスに出し、清掃登山を終了した。

2．那須クリーンキャンペーン＆清掃登山

9月6日（土）に開催された前夜祭には、支部会員1名、岳連等参加者約30名が参加し、各自が1品を持ち寄り懇親会が開催され、親睦を深めた。

前夜祭終了とともに雨が強まり9月7日（日）のクリーンキャンペーン＆清掃登山開催が危ぶまれたが、雨の中予定通り開会式が行われた。今年度は、地元那須町長や後援団体の栃木県より知事が出席し、会を盛り上げた。8時頃に雨も上がり、各会に分かれて清掃登山を行った。本支部では、朝日岳方面に5名、沼原方面に2名の会員が参加し清掃活動を行った。栃木県知事、那須町町長栃木県職員とともに2名の会員がロープウェイ山麓駅でパンフレットや、登山届の用紙を渡すなどのキャンペーン活動を行う。午後3時にはクリーンキャンペーン＆清掃登山等全ての活動を終了

した。

■埼玉支部　　高嶋　徳紘

２０１４度活動方針：公益法人をいただき当委員会は山岳生態系を調査研究しもって地域社会に貢献することを目的とする。

基本的活動

①シカ被害実態調査は第４回４年目を迎え多摩、山梨支部と情報交換をする。

関東山地東縁の八王子断層以西特に奥秩父においては林床植物はもちろん経済林（杉、ヒノキ）の幹皮までも食されて捨て置けない悲惨な状況である。このままでいくと、植生のダメージはチャートや石灰岩地帯を除き変成岩地帯（埼玉県に多くみられる）の地滑りが懸念される。駆除が急がれる。

②森造り活動は９月28日埼玉緑の森博物館周辺で実施、午後観察会を行う。

（植林の樹種に防災対応のブナ科を取り入れる意見がある）

観察会の行われる［狭山丘陵］は入間川浸食により関東山地から分離された特殊な地帯でイノシシ・シカは棲息せず広葉樹の分布や豊富な湧水などで東京都の重要な水瓶の一つになっている。危険な生物は稀なので教育の森として位置付けされている。

③絶滅危惧種調査は10月18～19日に全国支部懇談会が秩父市で開催される

19日に武甲山（石灰岩質）が記念登山の一つに選定されたので好石灰岩植物の調査撮影は９月１日現在完了している。当日ロビーに展示する。希望者に埼玉の絶滅危惧種一覧を無料配布することになっている。

④自然観察会は昨年同様、教育委員会後援をいただいており11月30日に埼玉県越生町越生駅頭ＡＭ９時30分集合で行われる。

テーマは「地層逆転の大高取山」サブは（晩秋にフユイチゴ・ユズ・冬桜）標高３７６ｍ三等三角点の頂上付近は秩父古生層の堆積岩地帯であるがその下の地層と山麓はミカブ緑色岩の変成岩である、近隣にも同じような山が存在している、太古の地殻変動による常識では考えられない事実を観察する毎年恒例のイベントです。

●　秩父古生層がなんとミカブ緑色岩の上にあるのです、地層累重の法則では古い地層は下、新しいのは上となっています観察会の目的の一つは現地確認であります。

■千葉支部　　鈴木　美代

千葉支部のエリア的特性として、現生の自然がほとんど存在しない、ということがあげられます。したがって、自然保護という活動は厳密にいうと成り立たないのかもしれません。

このため、これまでの千葉支部の活動は、まず千葉の自然を知ろう、をキーワードに、自然観察会、講演会を中心に行ってきました。25年度にも、２月に、高尾の森づくりの会のご協力を得て、冬芽の観察会を企画しました。

今年度も、年明けに、今度は千葉で、冬芽観察を企画したいと思っています。

しかし、現生の自然が少ないといっても、千葉には豊かな里山があり、これはこれで広い意味での貴重な自然、と呼べると考え

ます。この観点から千葉における自然保護の意味を見直したいと考え、今年度は、千葉県里山シンポジウムに参加し、各地で様々な取組が行われているのを知ることができました。

来年度以降の継続的参加により、各団体との連携も視野に入れつつ、千葉支部として取り組むべき課題を見定めてゆきたいと思っています。

■東京多摩支部　　河野　悠二

東京多摩支部発足と同時に自然保護委員会を立上げて4年が経過し、委員は担当幹事2名を含め16名である。主な活動内容は次の通りである。

☆他団体との協力、参加活動

・都岳連・自然保護委員会の御前山カタクリパトロール参加：4月下旬の約10日間（保護柵の設置・撤去、頂上でのトイレテント設置と携帯トイレ販売、沢の水とトイレのアンケート、カタクリ保護のピーアール）

・都レンジャー（サポートレンジャーを含む）との協働作業

七ツ石山ゴミ清掃活動（２０１３年11月、9名参加）、雲取山石積み作業（登山道の複線化防止による植生保護、２０１４年5月（1泊2日）、8名参加）

・全国水環境マップ実行委員会による「身近な水環境の全国一斉調査」（毎年6月に多摩川と秋川の合流地点で実施）

☆ボランティア活動

・アツモリソウ観察会と除草作業（毎年6月に1泊2日で実施）

・国立四小、高尾山ハイキングに協力・支援（年1回実施）

☆観察会の実施

・御岳山レンゲショウマ観察会（毎年8月、一般募集）

・高尾山シモバシラ観察会（毎年1月、一般募集）

☆自然保護講演会

・自然保護に関する講演会を開催（毎年11月頃に実施）

☆自然保護委員会

・月1回委員会を開催

■越後支部　　七澤　恭四郎

越後支部自然保護委員会の活動は委員長と委員3名を中心に支部構成員とで清掃登山を行い、さらに他の委員会とともに公益事業を一般にも呼びかけて下記のような活動をしている。

平成25年度支部自然保護委員会の活動

5／25日　越後支部総会

5／26日　新潟.福島県境にある九才坂峠（ここには昭和41年越後支部が創立20周年記念事業として県境踏査686.9km をした時の記念プレートがある。）目指岳にて清掃登山を行う。

7／5日～6日　自然保護全国大会（立山）10名参加

7／25日　弥彦山たいまつ登山祭.新潟県登山祭.高頭祭（高頭仁兵衛二代目会長の顕彰と遺徳を偲ぶ）に参加し清掃登山を行う。

10／13日　公益事業として公募登山「山

コン at 南葉山 949m の素敵な出会い」を新潟出会いサポート事業と共催でやり、婚活が主であるので、簡単な山の説明と自然保護についての啓蒙をする。

３／30日　弥彦山雪割草パトロール

他に新潟県山岳協会主催による、春.秋の自然保護研修会参加

＊将来の研究課題　新潟県は豪雪地帯が多く、年間の地温が低いためか、標高２００m前後の低い丘陵地までブナ林が広く分布している。調査をしてみたい。

■石川支部

埴崎 滋

来年３月14日に金沢まで延伸開業の北陸新幹線がカウントダウン段階となり、地元は黒船到来の事態に日々期待と不安の交錯のようである。

里山（地方部）の見直しと掘り起し構築が世を挙げて提唱されて久しいが、２０１１年６月世界農業遺産指定の「トキと共生する佐渡の里山」に併合指定の「能登の里山・里海」にようやくスポットが当たりだした。白米千枚田、輪島塗、あばれ祭り、あえのこと（各農家毎の田の神への信仰行事）、いしり（魚醤）等がランドマークである。「能登はやさしや、土までも」と持て囃された片方で、彼の地一帯の過疎化と高齢化は拭いようのない進み方で、県の施策の先取り追及もあり、昨年からの能登有料道路が「のと里山海道」として全線無料化され、どうにか交流人口も増え、集落の祭りやイベントにも活気が感じられるようにはなった。訪れた人たちの率直な感想は「忘れかけたふるさとの人の温かみと、伝承文化の奥深さとその継承」が先ず挙がり、都会地では感じ得ない自然環境の素朴さに調和した暮らしの中の（癒し）の世界があると語られます。成長指向の都市集中型で温度差拡大社会の「職・住接近依存」実態からは一歩距離がそこには歴然と存在する。こうした全国的にも類似進行の環境下で「ただ今、元気活動中」の当県能美市を紹介する。「いしかわ動物園」「加賀九谷焼の発祥地」「国立北陸先端科学技術大学院大学」と六鈴鏡・鈴付銅釧の出土がある「秋常山古墳」「開湯以来１４００年の辰口温泉」が立地する加賀平野のほぼ中央に位置し、白山山系から流出する手取川と梯川に挟まれた83平米の扇状地と能美丘陵を擁する人口５万人弱の平成大合併時に誕生の新市である。森元首相、メジャーリーガーの松井秀喜を輩出した典型的な田園集落ではある。大手繊維メーカーの工場、重電大手の現地法人も立地するが、所詮、国内あちこちの農山村地帯とは大した違いはない。この自治体の特徴は産学連動の実に恵まれたロケーションを梃に、町造りのコンセプトが明確に示された〈能美の SACHI まつり〉として年間を通して色々のイベントで市民参加型のプレゼンテーションを展開している点である。S＝シエアサステイン（持続）、A＝アート＆アカデミック、C＝カルチャー、H＝ヒューマンヒストリー、I＝インタネーションエクスチェンジ（国際交流）の頭文字を当て、これらのタグに調和し時宜に即した行事のアナウンスが市民の共感を得ているようだ。

広島での全国集会では、これらの「地域興し」の諸活動から自然発生した、「能美の里山フアン倶楽部」副会長で、白山自然ボランテイアガイドの**安田二三男会員**（ステージ名＝ふーさん）から「**里山のスタデ**

イ・ワーキングから展望する究極の魅力」と題した日常活動の一端を紹介することとします。

■福井支部　　船田　洋子

福井支部では、「泰澄の杜」近くの越前町町有地を貸与していただき、平成20年10月から里山の再生（持続可能な自然との共生をしてきた祖先との知恵に学びこれを受け継ぐ）という目的のもとに活動を開始しました。

名称は「みんなの里山」

「みんな」としたのは、誰もが立ち入り自由な憩いの場所になればとの思いから、と　森づくりのリーダーが命名しました。

開始時にはススキの生えた残土置き場だった場所でしたが、6年経過した現在、栗やコナラが根付き、小さいながらも雑木林の雰囲気が出てきました。

この雑木林の西側急斜面の下に池がありますが道がなかったため、池を一周する散策路を造り、また主要地方道に面している側からも散策ができるよう道を拡張する作業をしている所です。

当初は一年に2回の草刈と整備でした。その間の下草刈りは越前町糸生地区の有志の方々がして下さっていましたが、今年からは毎月1回作業に入ることにしました。

8月は大雨の為中止になり、9月に行ってみてびっくり、草が生い茂り足の踏み場も無いほどに、池にはガマが半分以上も生い茂り、これでは鳥の入る余地も無い状態。取りあえず草刈機を使う人、女性群は栗・コナラ・山桜にクズの木が絡まっているのを取り除きながら草刈を行う。年2回だけでは相当に荒れていただろうと、地区の方々が折に触れ草刈をしてくださっていたのだと思うと、始めたからには責任を持って継続していくことの大事さを痛感しました。

当面の課題は散策路を整備し、池にはびこっているガマの除去、道路側にはお花を、渡り鳥が羽根を休められるような池・・・などなど夢を膨らませている。

「みんなの里山」に地域の方々が足を踏み入れていただけるような場所になるよう皆で努力して行こうと思っております。

■山梨支部　　遠山　若枝

○平成26年度実施事業について

・平成26年4月13日
　支部山行（醍醐山）、定時総会　甲府駅ビル5階にて

・平成26年4月20日
　第33回深田祭　韮崎市深田記念公園にて
　記念山行（茅ヶ岳）

・平成26年5月17・18日
　第4回中部ブロック交流会（越後、信濃、山梨、静岡支部）伊豆天城山ほか

・平成26年6月7・8日
　東京多摩、埼玉、山梨3支部交流会
　富士山吉田口登山道5合目までと青木ヶ原樹海周遊の2班に分かれて実施

・平成26年6月～9月
　山岳レインジャー活動　奥秩父、御坂山塊、甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳、鳳凰三山、白根三山で実施

・平成26年7月5日
　第10回山の博覧会　山梨学院メモリアルホールにて

講演テーマは富士山噴火の歴史と青木ヶ原樹海の生成他
山の日制定関連プロジェクトの一環として開催
一般参加者４３０名、
会員参加者３０名
・平成26年8月2日
第1回富士山美化クリーン作戦（富士山6合目）
・平成26年8月8日
山梨県緑の教室（櫛形山）
・平成26年9月9日
第2回富士山美化クリーン作戦（富士山6合目）
・平成26年10月19・20日
第55回木暮祭　北杜市須玉町金山平にて
奥秩父の父当会第3代会長木暮理太郎の遺徳を偲ぶ碑前祭。記念山行（横尾山）

○山岳レインジャー活動は、日本山岳会山梨支部が加盟する山梨県山岳連盟が山梨県から委託され実施した。山岳連盟の自然保護委員会に登録する会員が希少高山動植物の調査活動を行った。

当支部担当時期・山域
・平成26年6月26日
大菩薩南嶺・大蔵高丸（調査者　3名）
・平成26年7月14日
御坂・黒岳（調査者　2名）
・平成26年7月27・28日
南アルプス・甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳（調査者　2名）
・平成26年8月17・18日
南アルプス・鳳凰三山（調査者　3名）
・平成26年9月3・4日
南アルプス・北岳（調査者　2名）

■信濃支部　穂苅 康治・植松 晃岳

山の日制定と播隆上人

山の日が超党派の議員連盟によって制定されたことは、周知のとおりですが、山の日制定議員連盟の事務局長をつとめた務台俊介氏のご先祖である務台景邦氏が、槍ヶ岳に播隆上人が善の綱を掛けた時に綱の材料である藁を提供された方であり、播隆上人が最初に尋ねられた信州における支援者の一人であったことは知られていないようです。

登山道整備

山の日制定の影響かもしれませんが、昨年から、松本市が北アルプス南部地区の登山道整備に5百万円を負担するようになっていますが、今年は、安曇野市も同じく5百万円負担するようになりました。安曇野市は、大滝山、有明山等の里山に近い山もあり、そちらの登山道整備に支出が偏っていますが、それでもありがたいことです。

また、播隆上人の槍ヶ岳開山の案内人を務めた中田又十の末裔の方を中心に、当時の飛州新道を改めて再興しようという試みもあり安曇野市としても支援する動きもあります。飛州新道は、信州小倉から、大滝山、蝶が岳をへて、古池に下りて、焼岳から飛騨の中尾、栃尾へ至る信飛の交易路として信州の岩岡伴次郎らが、松本藩の支援を得て開いたものです。中田又十は、開削の責任者としてかかわっていました。

槍ヶ岳関係では、松本市・長野県の支援をいただき、昨年は大曲の登山道崩落地の復旧をして、今年は一の俣崩落地の補修をしました。一の俣の崩落地は、規模が大き

く、完全な整備には治山や砂防クラスの力が必要ですので、当面は、崩落地上部の落石に気をつけて止まらずに通行してください。また、環境省の事業で南岳のキレット入口の補修を行いました。前穂周辺、西岳周辺、蝶が岳周辺等でも最寄りの山小屋が登山道補修をしています。

車両の通行規制

安曇野市には、燕岳、常念岳、蝶が岳と人気の山がありますが、どこも、車で簡単に登山口に入れるため、トレールランナー等日帰り登山者も多く、道路が駐車場と化し、緊急車両の通行を妨げる等の問題も出ています。安曇野市観光協会等で解決策を検討中ですが、上高地の様な解決策が出来ると良いと思っております。

新穂高周辺でも登山者の違法駐車が問題になっております。

山岳会としても会員にアピールしていただければとおもいます。**（穂苅　康治）**

シカにとって北アルプスは棲みやすい環境なのか？

誰もが一番怖れていること、それは北アルプスへのニホンジカの進出です。乗鞍、槍穂高、常念、白馬、雲の平、立山・・・北アルプスのお花畑はシカにとって魅力的な環境です。しかし山が切り立っており、谷も急峻で、豪雪地帯であることから、シカが簡単に入ることができる環境とはいえません。そのことは、北アルプスが本来カモシカの領分であり、シカは生息していなかったことからも明らかです。ではなぜ南アルプスにはあれほどシカが進出したのでしょうか。仙丈ケ岳、塩見岳、北岳、赤石岳・・・どの山も奥深いところにありますが、山裾まで林道が伸びています。周辺にシカが数多く生息しているということもありますが、林道がシカの進出の手助けをしたことは間違いないでしょう。

北アルプスのシカは現在どうなっているのでしょうか？これまで乗鞍岳、焼岳、上高地、鳴沢岳、鹿島槍ケ岳、栂池高原など各地で目撃されています。確かに北アルプスの一部にもシカは進出しています。しかしあくまでも“目撃”であって、恒常的な生息ではありません。また被害も出ていないといっていいでしょう。それが現状です。

では南アルプスや八ヶ岳、霧ヶ峰などはどうでしょうか？既に大きな被害が出ているため柵が設置されています。しかしその柵は“ほんの一部の場所の植生の復元”のためのものであり、南アルプス全体への“侵入を防ぐ”ものではありません。被害がまだ報告されていない北アルプスにはまだ柵はありません。だからといって南アルプスのようにならないように、あらかじめ北アルプスに柵を張り巡らすなどということは現実的に不可能です。

そうした中で環境省、林野庁、関係各県、市町村は現在連絡協議会を作り「中部山岳国立公園ニホンジカ対策方針」を作って活動しています。どんなことをしているかというと、調査や情報収集、保全対象地の選定、リスク評価の基準、周辺地域での捕獲試行、啓発などに留まっています。現在できることはそれ以外にないというのもまた事実です。

長野県林務部による県内の推測生息数は、２０１１年で 105,000 頭とされていま

す。県は２０１５年度末までに、３分の１にあたる35,000頭まで減らすことを目標にしています。ハンターや柵作りなど人手の不足、シカ肉の流通ルート、限られた予算・・・立ちはだかる障害は大きいのですが、とにかく絶対数を減らすしか方法はありません。これ以上の被害や高山への進出を防ぐためには、それしか方法はありません。

北アルプスがシカの生息地になるかどうかはわかりません。冷静に考えればこれ以上シカが進出し、生息地になるとは思えませんが、ゼロでないことも確かです。そしてそのときは、手遅れです。まずは行政任せにするのではなく、山の自然や魅力の最大の受益者である登山者や関係者が声をあげ、主体的にかかわることもまた必要です。日本山岳会もこれまで啓発、情報収集、柵設置協力など、その保全のためにかかわってきました。さらに何ができるのか、もう一度検証してみることも必要です。

それにしても数が少ないときは保護し、数が増えると駆除する・・・シカは何も悪くないのに、人間の都合に振り回されています。

（植松　晃岳）

■東海支部

川合　鉛一

東海支部の「自然保護委員会」は、支部の28余の委員会・研究会等の活動組織の一つとして位置付けられ、原則毎月第２木曜日午後７時から定例会議を開催している。

毎定例会議の出席者は８名～12名程度である。なお、委員長は、支部の常務委員会の構成員となり、支部活動との連携を図っている。

平成26年度活動計画（実績）

①自然観察山行

特徴的な自然生態や自然環境等を対象とした「自然観察山行」を毎年実施している。本年度は20名の参加の基に７月12日～13日、長野県「赤沢自然休養林」及び昭和59年発生の「長野県西部地震による御岳崩れ被災地植生回復状況」を視察した。

②18回森の勉強会

例年、東海支部、関西支部及び京滋支部共催で開催している行事であるが、本年は東海支部が主管となり、次の通り計画している。多数の参加を期待している。

日程：平成26年11月８日(土)～９日(日)

１泊２日

場所：座学＝岐阜県土岐市「柿野温泉」八勝園湯元館

フィールド＝「東京大学赤津研究林」及び「東海支部・猿投の森」

内容：赤津研究林での「森林保全と水の関係」の基調講演と現地見学　及び「猿投の森」の森林生態等の調査報告と森づくり活動状況等。

③「猿投の森」での動物調査

昨年来の定点カメラによる動物調査を継続実施すると共に、本年度は両生類調査も実施する。

④関連行事等参加協力

次の諸行事等に参加協力する。

○猿投の森づくり」活動

○第６回森の音楽祭

○「HAT-J　清掃登山」・・・等

■京都・滋賀支部　　酒井 展弘

1．比良スキー場跡地の整備

滋賀労山の人達と共に、比良スキー場跡地崩壊防止の為、土嚢を現地で作り、それを土砂が流出崩壊している所に、有効に流出防止、崩壊阻止ができるように積み並べる作業を数次にわたり実施。短期では有効なように見えるが時間の経過と共にどの様に変化していくか様子見の段階。

またゲレンデ跡地を更地にしたために、どこでも歩行できるようになった。植生の回復と斜面の崩壊防止の為に、登山ルートを設定し他の場所には入れない様に、ロープを張って登山道に誘導するようにした。(12月15日)

2．ダンダ坊及びそこへの遊歩道の整備

以前、滋賀県教育委員会がこれを整備したが、ダンダ坊跡及び遊歩道が荒廃してきたので、その整備を行っている。(7月16日、11月予定)

ダンダ坊は比叡山延暦寺関連の修業のための寺坊で、比良山麓に多くあったが、信長の焼き討ち等にあい、廃寺となった跡地で長法寺跡等も史跡とされている。

3．トチノキの大木の保護

土倉鉱山跡地の奥にトチノキの大木の森がある。このトチノキを伐採して中国へ売ってしまうとの事である。この森を保全すべく多くの団体、個人が保全の要望書を県に出しているが京都・滋賀支部も一助になるべく、とりあえず現地調査を行った。現在皆伐に当たるとの事で伐採は中止されている。

滋賀県湖北土倉出口から杉野川を約2km遡ると土倉鉱山の跡がある。明治40年以来約60年間銅鉱石を採掘し、昭和40年閉山。最盛期(昭和31年頃)には月産5千トンを産出。400人の鉱夫が居たとの事。現在も遺構が残る。墓地跡と思われる所に花が手向けられトマトが供えられていた。(7月31日)

4．自然保護観察会

①ヤマシャクヤク定点観察　良好に保全されている。(5月10日)

②ベニバナヤマシャクヤク　ベニバナヤマシャクヤクの保護の為オニヒカゲワラビを伐採する。(6月8日)

③ベニバナヤマシャクヤクの種　ヒトデの様な鞘がはじけて真っ赤な鞘の中に濃紺の種が見られる。一面を真っ赤に染める。(10月4日)

5．第2回シカの肉を食べる会(12月6日～7日に予定、美山)

■関西支部　　斧田 一陽

関西支部の自然保護活動は、「関西支部自然保護委員会」を中心に、支部構成員や「日本山岳会関西支部本山寺山の森」で活動する「本山寺山森林づくりの会」会員、さらに一般にも門戸を広げて活動しています。

1．本山寺山森林づくり活動

定例活動日を月2回に増やして、森林整備活動を実施しています。大阪府では貴重なモミ、ツガ、アカガシの冷温帯樹林を含む国有林を社会貢献の森協定を締結して活動しています。活動メンバーが固定してきたこと、活動地近隣住民の会員が少ないことなど問題もありますが、生物多様性豊

かな森林づくりを目指して楽しく活動しています。

2．東お多福山草原復元活動（協働活動）

「東お多福山草原再生・保全研究会」の参加活動団体は、9団体に増え面積も拡大させて、ネザサ草原からススキ草原への復元を目指して活動しています。年5回の作業活動の他にガイド養成講座を行政と協働で実施しています。活動団体、研究機関、行政の一体的活動が特徴です。

3．大台ケ原の利用に関する協議会

近畿地方環境事務所を中心に、関係者の連携・協働を図る会の構成員として参加しています。大台ケ原周回線歩道の改修現地説明会にも参加して、水切り溝の設置など改修方法の検討を実施しました。

4．自然観察会とやまみち巡視活動

第18回森の勉強会は、東海支部の担当で11月に開催されます。本山寺山でも年数回開催し、ニホンジカによる食害被害やカシノナガキクイムシによるナラ枯れ被害の観察を実施しています。ナラ枯れ被害の対応は、検討中です。森づくり活動地に隣接するやまみちの巡視保全も実施しています。

■広島支部　　野島 信隆

Ⅰ．H26年度活動方針

JACは昨年公益法人となってより公益性の高い活動が求められており、「山の日」についても山岳5団体が制定に向けて国会議員団に働きかけ、5月の通常国会で「8／11を国民の祝日に」が可決された。

広島支部独自の活動としては昨年同様、分水嶺新道の登山道整備と高岳&聖山の山頂周辺の整備と共に、八幡高原の霧ケ谷湿原再生地を保全する為の調査・整備に取り組んでいる。従来から取り組んでいる、ひろしま「山の日」県民の集いやJAC自然保護全国集会等の機会を捉えて、広島支部の活動を他の団体や他支部に対してのアピールは継続していく。

今年はJAC自然保護全国集会がUAA総会に合わせて広島で開催されるので、「広島でやって良かった」と言われる会議にしたい。

Ⅱ．H25／10～H26／9の活動実績

1．JAC広島支部　独自事業

①中央分水嶺「聖分れ～匹見ルート」登山道整備、②聖山 山頂整備、③高岳 山頂整備、④霧ケ谷湿原再生地の手入れ・環境整備

2．第13回ひろしま「山の日」県民の集いの行事

①北広島会場　霧ケ谷湿原再生地の手入れ・環境整備、②第13回ひろしま「山の日」シンポジウム・前夜祭③森の手入れ等（安芸太田町 深入山他）

3．西条・山と水の環境機構の行事

①龍王山 山のグラウンドワーク、②龍王山 水のグラウドワーク

4．NPO法人西中国山地自然史研究会事業

①千町原　秋の草刈り（八幡高原 千町原）、②雲月山 山焼き（雲月山）、③千町原 野焼き（八幡高原 千町原）、④千町原 夏の草刈り（八幡高原千町原）

5．広島県山岳連盟が主催・協力する自然環境保全・登山道整備の行事
①広島県自然保護研修会(宮島・弥山)
6．ＪＡＣ自然保護委員会・森づくり連絡協議会の主催事業
①ＪＡＣ森づくり連絡協議会全国集会(広島　賀茂泉館・龍王山)
7．広島土砂災害　復旧ボランティア
①２／20(水)の災害に対して、広島支部から団体ボランティアとして参加

■四国支部　　宮本 良之

～剣山山系のオオヤマレンゲ保護活動～

日本山岳会四国支部の会員有志は剣山国定公園の監視活動をしているＮＰＯ法人剣山クラブと協力して、徳島県三好市の剣山山系に群生する希少植物オオヤマレンゲ（同市指定天然記念物）をシカの食害から保護する活動を続けており、被害が最小限に食い止められている。

オオヤマレンゲは高知県境の高ノ瀬（1740㍍）から西へ約800㍍までの北斜面に群生。四国一の規模を誇るといわれる。今年6月には会員らが現地に行き、花付きを確認し、天然記念物指定を説明する解説板と群生のエリアを示す境界杭を設けた。

保護活動が軌道に乗るまでには、両団体の努力があった。群生の情報を聞いた現在の四国支部の会員は、株数を数えるために現地入りしたのが2006年。まだ四国支部がでる6年前のことだ。「大峰の規模に匹敵するのではないか」などと騒がれるとともにシカの食害が深刻であることが分かった。翌年、地権者の徳島森林管理署の許可を得て3カ年計画で本格的な生育調査が始まった。

調査は、番号入りの名札を一株ずつに付け「翌年どう変化しているか」を調べる内容。急斜面では転落を防ぐためロープで体を確保しての作業だった。上り約3時間半、下りは約2時間を要する登山が前提となる。

調査の結果、樹皮を食べられていることから「いずれ枯れる」と予想される株は毎年増加。09年6月時点で約100本あった株のうち3割が枯死していた。

その後、被害がさらに拡大している実態が分かり、会員らは「絶滅するのでは」と危惧した。保護に前向きだった行政などの関係機関が、抜本的な対策に乗り出したのは12年。群生地にシカが入らないよう、会員らがエリアを囲むよう防護ネット（総延長600㍍）を設置した。剣山クラブの「宝物を守るためには行政の力が不可欠」とする要望によって市の天然記念物になった。

今夏には、2年前に設けた防護ネットに効果があったことを確かめた。ネットの内側にわずかながらシカの痕跡があったが、糞の多くは外側で見られた。

しかし剣山山系のシカはなお増えている。オオヤマレンゲの群生エリアへの侵入を完全防御が今後の課題だ。一株ごとにネットを張るなど、新たな対策の計画も急務といえる。私たちは、来夏も清そな白い花が無事咲くことを信じ「実のある活動がこれからも必要」との気持ちで継続する覚悟だ。

■東九州支部　　飯田 勝之

1．スズタケ枯死とシカの食害調査

かっては九州の山々の林を覆いつくしていたスズタケが広い範囲にわたって枯れる状態が見られるようになり、ほとんどの山地で壊滅的状態に至っている。その原因には諸説あるが、近年繁殖の著しいシカの食害説がある。シカの食害はスズタケに限らず樹木や山野草にもかなりの影響を及ぼしていると見られている。

当支部は公益法人化を期に、スズタケ枯死の実態を把握するための定点観測を計画したが、その実施にあたっては県の委託を受けて実態調査を開始したばかりの大分県植物研究会と共同作業の話がまとまった。

本谷山の標高１４００m付近の稜線上に県が設置した定点観測地点があり、ネットで囲った場所と、その横の地点のスズタケの生育状態の差を調査することや、尾平越から本谷山に至る稜線の樹木の食害状況調査などがその主な作業で、毎年6月と10月の第1土曜日が定期観測日である。この作業には当支部からの参加者7～9名と同会のメバーの計十数名が毎回チームを組んで行っている。過去4回の観測で、シカの食害状況はかなり明らかにされてきたが、まだまだ息の長い観測が必要とされよう。

2．清掃登山

毎年10月に九重山坊ガツルのアセビ小屋で支部の合宿を行っているが、その往復で登山道の清掃を行うことにしている。このため、アセビ小屋への入山、下山ルートは毎回変更し、数多い九重山の登山ルートをその都度選んで行っている。近年の傾向として、以前のように山道に空き缶、空き瓶、たばこの吸い殻などのいわゆるゴミ類は少なくなったが、山道での落とし物のタオルやバンダナ、ビニール袋などが見られる。また、登山者が勝手に付けたと見られる目印のビニールテープやプラスチック製の無意味な道標などもあり、これらの撤去も行っている。

3．大船山山頂付近のミヤマキリシマの支障木除去作業

大船山一帯のミヤマキリシマの群落地は天然記念物及び国立公園の特別保護区に指定されているが、近年支障木の生長で枯死、衰退が著しい。このため県が環境省の許可を得て大船山山頂付近の限られた範囲のノリウツギやヤシャブシなどの支障木の除去作業を行っている。この作業は県がＮＰＯ法人に委託して行っているが、同団体の呼びかけによるボランティア参加のかたちで支部も作業に参加している。

4．その他

支部会員の個人的な取り組として自然公園指導員の会員が山道での自然保護の指導にあたったり、自然観察指導員の会員が、自然観察会などで活動したり、湿原保護や原野維持のための野焼きボランティア参加の個人的参加などがある。

■宮崎支部　　前原 満之

宮崎支部の自然保護活動は、２００１年（H13）４月の委員会制度発足を契機に、自然保護委員会として自然保護活動について積極的に取り組むことになった。

1．森づくり活動

登山を通じて自然に親しんでいる我々は、登山行為そのものが自然を傷つけずには成り立たないことを痛感する中で、自然に対しなすべき具体的な実践活動として森づくりを始めることになった。

２００１年（Ｈ13）～２００２年（Ｈ14）植樹後、毎年６～９月に２回、３月に１回の育林作業を実施している。最後までカヤの繁茂が衰えなかった田野の森も、ようやくカヤは点在するほどとなってきた。今や山には水が湧き出し、会員が種から育てた苗木を植えたヤマザクラが咲き始めている。

①宮崎支部森づくり活動の特徴

宮崎支部の森づくり活動は、自然保護委員会が中心となり、会員のみで活動している。一般市民との連携については、自然保護委員長が事務局をしている市民活動団体「水源の森づくりをすすめる市民の会」に支部として団体加入しており、そこでの活動が市民と連携した活動となっている。

②今後の予定

３ヶ所とも下草刈が一段落しので、今後は当面、枝打ち徐伐等の育林作業となる。

2．宮崎自然休養林の登山道点検報告

２００２年（Ｈ14）２月、宮崎森林管理署から当支部に対し、宮崎自然休養林登山道の点検・保全巡視の依頼があり、依頼に応えることになった。加江田川側方面からの斟鉢山・花切山等への登山道について随時、会員からの情報に基づき登山道の状況を点検し、報告（登山道の不良状況、標識の不備等）を行っている。その後、２０１１年（Ｈ23）６月宮崎森林管理署との協議の中で、双石山についても同様の点検の依頼があり、今後併せて報告することとなった。森林管理署からも報告に基づく改善結果の状況報告をいただいている。

3．清掃登山

１９９６年（Ｈ８）から毎年12月、双石山、斟鉢山、花切山、青井岳等の清掃登山を実施している。宮崎市街地に近く、多くの人が訪れる山をきれいに保っていきたい。

フィールド	植栽月日	面積	植栽木	フィールドの所有者状況等
ロキシーヒルの森	2001/10/14	0.1ヘクタール	広葉樹 200 本	知人の私有林（市内から北へ 40 分）
田野の森	2002/03/17	0.5ヘクタール	広葉樹 700 本	国有林（市内から南へ 50 分）
野尻の森	2002/03/21	0.5ヘクタール	広葉樹 700 本	会員の里山（市内から西へ３５分）
合　　計		1.1　ヘクタール	広葉樹 1,600 本	

11月23日（日）広島山岳平和祭、国際シンポジウム発表要旨

写真が語る山の自然 ―今・昔―

自然保護委員　下野　綾子

近年、世界各地の高山帯で植生の変化が報告されるようになりました。これらの変化は過去の記録があるからこそ検出できるのであり、多くの高山地域では変化の有無を判断する科学的な調査が不足しています。この不足を補えるのは、唯一過去に撮影された写真であり、写真は調査記録に代わる客観的な記録となりえます。そして過去に撮った写真と最近撮った写真の比較ができれば、植生の変化を検討することが可能となります。

本誌でもすでにご紹介してきましたが、自然保護委員会では二〇一一年から撮影年月日の分かる過去の写真の収集を始めました。

山岳平和祭では、実際に過去の写真と最近の写真を比較して、植生変化の様子を知ることができた例をご紹介する予定です。なお山岳雑誌の岳人でも紹介していますので（二〇一三年二月号・十二月号）、バックナンバーを手に取る機会がありましたら是非ご覧ください。

例えば次の写真は八甲田の湿原、毛無岱です（写真①、②）。低木帯が広がり、樹高も高くなっていることが分かります。毛無岱の湿原が縮小傾向にあることは、すでに研究者から報告されているのですが、写真の比較からもその傾向がみてとれます。

もう一組、大菩薩峠の写真を紹介します（写真③、④）。標高が低いにも関わらず、稜線は草原となっていて開放的な景観を楽しめます。ですが、昔に比べると樹木が増え成長している様子が分かります。この峠は本来樹林が成立する標高ですから、なぜ草原が成立しているのでしょうか。かつてこの周辺は人の生活に利用されていて、草地が維持されていたようです。だとすると森林に戻っていくのは自然の営みの流れでしょうか。

自然の営みの中でも、植生は少しずつ変化していくものです。人為影響による不自然な変化なのか、自然の営みによる変化なのか、見極める目を養う必要を感じています。

写真 1．1974/7/20　延島冬生氏撮影

写真 2．2012/7/20　著者撮影

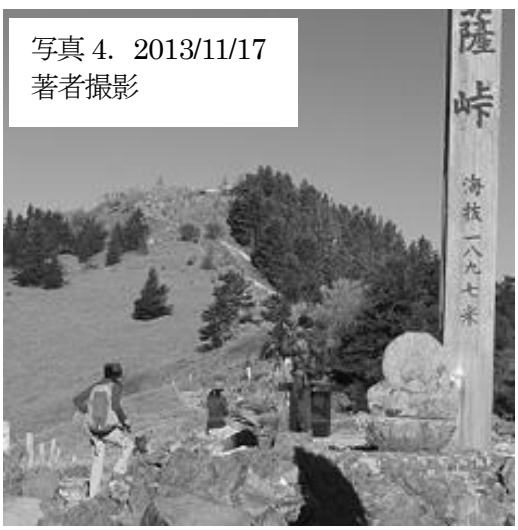

写真 4．2013/11/17
著者撮影

写真 3．1965/11/14
六甲長浜氏撮影

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈七月度〉

①山岳団体自然環境連絡会：6月27日（金）

出席者：近藤、渡邉

●各団体の報告

②自然保護委員会　7月23日（水）

●自然保護全国集会（広島）について

・開催日および会場が、11月22日（土）、広島工大広島校舎と決定。

・詳細は8月1日(金)、8月27日(水)の臨時実行委員会で協議決定する。

●『木の目草の芽』について

・リニア新幹線に関する記事は、両論併記とする。次号（南アルプス特集号）には、大船委員の意見（リニア新幹線建設に賛成する意見）を掲載する。

・編集方針について、次回委員会にて協議する。

〈八月度〉

①自然保護全国集会　臨時実行委員会

8月1日（金）、8月27日（水）

●統一テーマ、ワークショップのテーマ、参加費用、下見の実施方法などについて協議した。

●『木の目草の芽』111号発行

〈九月度〉

①山岳団体自然環境連絡会：9月11日（金）

出席者：渡邉、富澤

●各団体の報告

●広島山岳平和祭について

・欠席のガイド協会を除く6団体が参加を表明。

●トレランに関する環境省との意見交換

・10月17日（金）に意見交換会を開催する。

②自然保護委員会　9月24日（水）

●自然保護全国集会（広島）について

・記録機器や弁当の手配など、細部の確認を行った。

・「広島山岳平和祭」の発表概要書等に係る各種標記（英文標記や肩書きなど）について確認を行った。

●『木の目草の芽』について

・「112号」は、日本山岳会自然保護全国集会に関するレジュメ号とする。

・次回委員会より、テーマや原稿集めの担当者決めなど、編集会議を行うことを確認した。

購読料・カンパを
ありがとうございます。
8月8日～8月20日　敬称略
里見清子（甲府市）カンパ含む
新妻徹（札幌市）
合計3千円

〈編集後記〉 ■全国集会に向けて、9月初めより各支部自然保護委員長へ原稿のお願いをしてまいりました。今回は、メールアドレスのわかる方へはメールで、そうでない方へは郵便で依頼文を送らせていただきました。ご多忙中にもかかわらず、支部の取り組みをまとめてくださった委員のみなさま、ありがとうございました。

■御嶽山の噴火によって多くの犠牲者が出てしまいました。4年前のちょうど同じ時期、まだ紅葉のピークには少し早く、噴石の隙間に根を張ったクロマメノキだけが、毛氈のように赤く鮮やかに染まっていました。

例年より早く届いた紅葉の便りに、当日は誰もが胸躍らせて山頂を目指していたに違いありません。お亡くなりになられた方々のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。（元川）